



生物多様性インタビュー

阿部 夏丸 さん

小説家、矢作川水族館館長



企業城下町“豊田”のど真ん中を流れる矢作川で育った阿部夏丸さん。

川に出かける日は、年間 200 日を超えるとおっしゃいます。全国の川をご覧になり、地元の川が宝物だと気づかれました。

最近、小説の執筆、矢作川水族館の館長を務める傍ら、地元の子ども達と一緒に、川遊びを楽しんでおられます。こんな夏丸さんは、まさに生ける「川オヤジ」です。

小説家になられたきっかけを教えてください。

芸術大学を出て、幼稚園でお絵描きの先生を 2 年ばかりした後、サラリーマンを 8 年経験しました。当時は、多角経営の時代でしたので、本屋・ハンバーガーショップ・学習塾・コンビニの各店長を全部同時に任されて、朝 8 時ぐらいから夜 12 時過ぎまで働きました。当然、子どもの顔を見るのは朝だけです。ある日、出勤する際、娘に「お父さん、また来てね。」と言われ、「俺、このままじゃ駄目だな。」と思いました。最後に体を壊して、サラリーマンを辞めたのが、30 歳過ぎでした。

2 年間ぐらいプータローをしながら、絵本を描き始めました。もともと絵を描くのが好きでしたから。何作か描くうちに、こどもの頃から好きだった魚捕りや、その頃の川での体験を絵本にしたいと思うようになりました。でも、川での体験は印象が強烈過ぎて、満足する絵が出来ません。困ったあげくに、じゃあ小説にしたら書けるかもしれないと、そんな大それたことを思って、文章にしたのが『泣けない魚たち¹』です。

小説を出版社に持っていくことは、抵抗がありましたね。いちおう絵本作家志望でしたから、たまたま書いた小説を、持って行きたくなかったんです。でも、女房が「それ面白いから、持って行きなよっ」と言ってくれたので、しかたなく絵本の原稿と一緒に持っていったんです。そうしたら、出版社の人が「夏丸さん、絵本より、こっちの小説を本にさせてください」と…。だから、女房には、一生頭が上がりません。(笑)

結局、このデビュー作で 2 つの文学賞を同時にいただきました。ですから、子どもの頃、遊んだ川と魚たちには感謝ですね。まあ、出版社の人からは、「夏丸さん、もう逃げられませんかよ。」と言われ、しぶしぶ逃げ腰だった作家の道に入ったわけですけどね。

受賞した当時、多くの先生から「新しい」という評価を受けました。自分では何が新しいのか、訳が分かりませんでしたけど。でも、よく考えてみたら、「自然にやさしく」とか

¹ 1995 年に阿部夏丸さんが書き下ろしたデビュー作。第 11 回坪田譲治文学賞、第 6 回椋鳩十児童文学賞をダブル受賞した。



「生き物は大切にしましょう」とか言う、うそっぽい時代の中で、子どもが生きたザリガニをむいて餌に釣りをするとか、茹でて食べちゃうとか、そんな当たり前のことが新しかったんでしょね。

たとえば、こんな絵本がありました。

お爺ちゃんが宅急便で、カニを送ってきました。お母さんと子どもは「カニだぁ！」って大喜び。しかし・・・「まあ、このカニ、まだ生きているわ。」「かわいそう」「じゃ、逃がしてあげましょう」そして、そのカニを海に逃がしてあげました、めでたし、めでたし。

ちょっとまて！ ですよ。

こんな話がまかり通ったら、困りますよね。「地球にやさしく」「命を大切に」なんて、曖昧な言葉が流行だしてから、世の中おかしくなってきた。笑いごとじゃないですよ、じっさい、トンチンカンな環境活動には、これに近いものがたくさんあるんです。

だから、僕は絶対に「命を大切に」なんて言わないし、「自然のため」とか「地球のため」にとも言わない。子どもたちと川遊びに行ったら、「お前たち、思う存分、魚をやっつけろ。」と言います。生き物を触って殺しちゃうのは、子どもの愛情表現の一つなんです。そこで教えられるものの方が多い。だから、「とことん追いかけ、捕まえ、そして触れ」です。この子たちが20歳になっても、捕った生き物を殺し続けるんなら、僕は謝りますけど、絶対にそんなことはない。子どもは生き物を殺すのをちゃんと止めます。いや、その前に、飽きる。子どもが飽きるまで、大人は待てばいいんです。

乱暴かも知れないけれど、それでいい。命を全部守っていたら、世の中、バランスがとれない。だって、毎日、命を食べて(いただいて)いるんですから。

第一、自然はそんなに柔なものじゃないですよ。子どもが千切ったからとか、子どもが殺したからとか、そんなことでなくなる自然は、なくなってしまえと思います。僕たちの見えないところで、知らない大人たちが行っている自然破壊というのが一番問題で、人が人の手で、差して勝負して奪う命なんていうのは、たかが知れていると思います。本当に。

そんな僕の自然観と、子供たちと遊ぶ中で得た感動を小説にしています。もう30冊くらいかいたかな。これからも、同じだと思いますよ。たまたまなってしまった小説家ですが、やはり、子どものころ川で遊んだ記憶と、今目の前を流れている川、そしてそこで遊ぶ子どもたちが、僕に小説を書かせてくれている訳だから、川と子どもと生き物をキーワードにして、ずっと書いていこうと思っています。

矢作川水族館の館長になられたきっかけを教えてください。

賞をもらった後、BE-PALというアウトドア雑誌で連載を始めたり、日本中の川を回らせてもらったりしました。当時はまだ、バブルのなごりがあったから、結構出版社にお金を出してもらって、北海道から沖縄まで、行ってない県はないと思います。まあ、お酒は飲まないの、無駄遣いはしないですけどね。当然観光地など行かず、とにかく川に入って、網で魚を捕ったり、釣りをしたりしました。海外もブラジル、ミネソタ、韓国などに



行かせてもらいました。

自分の中の変化としては、最初は、よその川に行ける、よそは良いよねとずっと思い続けていました。しかし、ふと気がついたんです。例えば四国の素敵な川のあるところのお婆ちゃんが、「今度この川を、役所の人でコンクリートできれいにしてくれる。ありがたいことです」と言うんです。愕然としましたね。地元の良い川に誰も気がついてないのです。おかしいですね。日本中、どこにいても自分の家の周りの宝物に意外とみんな気がついてないのです。

その時、自分は家の前の川（矢作川）を宝物だと思っていたのかなって。ハッとしましたね。ダムが7つもある最悪な川。真剣に遊びもしないのに、そう思っていた。

そこで、10年くらい前から、地元の川を改めてしっかりと見はじめました。そうすると、面白いとこだらけです。ダムが7つもあるのに、こんなに魚がいる。しかも企業城下町の豊田市のど真ん中です。都市河川という意味では、日本一。こんな凄い川はあり得ないと改めて思いましたね。いまだに残る自然の凄さとか、魚種の豊富さ、川が好きな人が多いこと…。いろんなことを知って、矢作川を深く考えるようになりました。

でも、矢作川、矢作川って言うけれど、みんな本流しか見ていないんですよ。魚をよく観察してみると、ほとんどの魚が支流で産卵します。で、支流がどうかというと、農業用水路はみんなコンクリートで固められています。魚が減っていくのは、実は本流より、軒先の支流の問題なんです。それに気づいてからは、汚いドブ川に入って遊ぶということがだんだん多くなってきました。

僕が、矢作川のこと、公の場にデビューしたのは、6、7年前です。「川会議」という会合で講演を頼まれ、国交省、県や市、農業団体、漁協などの悪口を順番に、それも嫌われる覚悟で言わせてもらいました。ところが、後で漁協長が来て、「夏丸君、よく言ってくれた。俺たちは変わるからな」と言うんです。また、農業団体の若い子が来て、「あと10年たてば、きっと変わりますから」とって、ボソッと言いに来るわけです。面白かったですね。

そこから、何ができるだろうと考えたわけです。

豊田市というところは、矢作川研究所という素晴らしい機関があるし、漁協も頑張っている。また、天然アユ調査会なんていう市民団体もある。ただ、対象は資源になるアユだけなんです。アユは、矢作川にいる数十種類の魚の1種類にしか過ぎないんだから、あとの雑魚を僕たちが調べてやろうということで、矢作川水族館ができました。

水族館のスタートは、矢作新報記者の新見克也さんが水族館の活動を持ちかけてくれたことです。最初は、小さく内輪から始めようということで、矢部隆さんのような学者もいれば、まったく関係のない川で魚を捕るのが好きな人、昆虫や鳥等が好きな人とバラバラなメンバーでした。共通しているのは、川が好きということです。

水族館の一番の目的は、市民と川と繋げること、みんなにもっと川に遊びに来てよという活動です。そのために、僕らは水族館を名乗りながら、建物を持ちません。軽トラックの移動水族館しか持っていません。皮肉を込めて「箱物は嫌だよ」という、



そういうスタイルでやっています。川で採った魚を水槽に入れて、子どもたちに軽トラックで見せに行く。「どこで捕ったの?」「学校の前の用水路だよ」「うそっ、僕も捕りに行こう」これで、OK。建物を持たない代わりに、いろんな情報を発信して、川に遊びに来てよというスタイルをとりたかったんです。始めてみて分かったことなんですが、ウナギが川にいることを知らない学校の先生もいるんです。

また、楽しんでもらうのと同時に、雑魚の数字とデータを集め、行政に働きかけるといふ側面も持ちたかった。ただ、水族館を立ち上げてすぐに、アメリカナマズという外来魚が矢作川に現れたので、今はその調査に追われて、なかなか他のことまで手が回らないのが現状です。

アメリカナマズとの戦いは不毛なものです。ブラックバスやブルーギルと同じく、いなくなることはないと思います。でも、10年後、20年後の子どもたちに、「知っていたのに、何にもしなかったの?」なんて、言われたくないですからね。行政が動かないから、じゃー、やろうって言って、メンバーと始めました。おそらく、10年後、日本中の川でアメリカナマズは問題になります。まだ、どこの川も見つけてないだけです。矢作川で、たまたま見つけちゃったから、やらざるを得ない。川で遊び、川の恩恵を受けているんだから、しんどくてもやらなきゃ仕方ないですね。

たくさんの生き物が生きていることの重要性を、特に子どもたちにどのように伝えられていますか。

子どもたちには、いろんな顔があるというのはすごく素敵なことだという話をします。例えば、「クラスの子どもはみんな顔が違うよな。これみんな同じだったら、気持ち悪いぜえー。」って。また、運動会でみんなが同じだったら、「位置について、よーいドンで、ゴールは、横一線だぞって。こんなつまらない運動会はないよな。何回やっても一緒。」生き物は、いろんな顔、いろんな個性があるから面白い。

他にも、豊かな国というのは、どういう国なのかという話を時々します。

「アホの国と、お利口さんの国がある。お利口さんの国は、全員がオール4をとる。平均点でいったら、ランクはもの凄く高い。ところが、アホの国は、アホばかりだから、みんなほとんどがオール1。ただ1つだけ、走るのが早いと言われると、アホだから調子に乗って走ってばかりいるから、体育だけ5。こっちは歌が上手いと言われると、調子に乗って歌だけ5なんだ。でも平均点にしたらもの凄く低いアホの国と、平均点の高いお利口さんの国。どっちが豊なんだろう?」子どもは、首を傾げます。

「じゃあさ、オリンピックやってみようか。どっちが金メダル取る?」子どもたちは、すぐに分かります。「アホの国~」「じゃ、今度は音楽会をやろうかって。どっちの国が、素敵な歌が歌える?」「アホの国~」「アカデミー賞は?」「アホの国~」

豊かな国というのは、実はこういうアホな奴が一杯いる国なのです。みんな同じ顔をしてお利口さんになっても意味がないわけです」



川の豊かさと同じで、コイばかりがたくさんいてもつまらない。一見役に立たない小魚、虫、貝、鳥、わけの分からない生き物がいればいるほど、川は豊かだといえるんです。

また、繋がり話はよくします。生物多様性という言葉は、使いません。ただ、いろんな生き物の繋がり大きいほど面白いんだぞと。人と人も繋がりですが、生き物も、理由があって、全部繋がっています。いろんな生き物がいるというのは、食ったり食われたりもあるし、川岸に草が生えているから虫がいて魚の餌になるとか、草の根に卵を産むとかの関わりがある。そういう繋がりを分かりやすく見せてやると、豊かさの意味が分かる。大事なことは、川を踏み荒らしながら魚を捕まえて、遊びながら思わず魚を握りつぶしてしまう子供も必要なんだよって。それに付いてくる、お父ちゃんやお母ちゃんも必要なんだよって。人が関わらない自然というのは、面白くないよね。「きれいだね」なんて言っているだけじゃなくて、人が自然の中で一番いばっているんだから、人が一番関わらなくちゃいけない。良い自然は人が関わらないことですよってというのはおかしいよ。関わった上で、良くなっていかなくちゃいけない。

命の教育とか言うけど、それは、「大切だ、大切だ」という言葉じゃなくて、命の繋がりを分かりやすく全部見せてやるのが大切だと思います。「命は大切に」って言葉ばかりを教えるから、生き物と食べ物とかがこんがらがるし、ペットと野生動物の区別がつかなくなる。命の大切さの前に、正しい繋がり方、関わり方を学ぶ必要があるんです。

例えば、テナガエビを捕まえて河原で食べるんです。そうすると、まず捕って嬉しいっていう気持ちが生まれる。そして、それを串刺しにすると、子どもたちは「ざんこく〜」っていう気持ちが生まれる。残酷って言いながら顔は笑っていますけど(笑)。そして、それを火にかざすと身が焼けて赤くなってくる。「わあー、きれい」感動です。で、口に入れて「美味しい」となる。心が動き、繋がります。いただきます。ごちそうさまっていうのは、命に対しての礼儀です。私は牛を殺したことはありませんと言いながら、牛肉を食べている。昔はそういうのは見えたでしょうし、昔というよりも本来見なくちゃいけないんだけど、便利になって見えなくなっているから、人と自然・生き物との距離がどんどん離れてきている。もっと近づけてやりたいなと思って、僕はイベントで捕った獲物をみんなで食べます。みんな「美味しい」と言いますよね。自分で捕まえたものをまずいっていう子はいません。

生き物を守るための現在の取組について具体的に教えて下さい。

うちの近所に家下川^{やしち}という川があります。昭和30年代までは湧水がわき、コウホネが一面に咲く美しい川でした。しかし、高度経済成長期、あっという間に川は廃水で汚れて、泡がゴボコと出るドブ川になってしまった。当然、誰も遊ばなくなり、コンクリートで護岸されると川に下りる人もいなくなった。その後、周辺の下水は完備されましたが、アシが生え放題になって、人も入らず20~30年たちました。

ある日、この川で遊んでいる子どもを見つけました。魚が一杯捕れるというんです。こ



りやすごいってことで、子どもたちと一緒に川の水を引かずりとると、27種類も見つかりました。驚きでしたね。川が自らの力で再生していたんです。もちろん、護岸工事がなされ、湧水もないので、昔の川の姿ではありません。しかし、人間が手を加えなくても、川は自分の力で再生することに気がついたんです。本当に感動しました。

結局、橋の上からでは、何も見えないってことです。



2010.8.7に開催された「矢作川たんけんたい」の様子

橋の上から見おろしただけでは草だらけでつまらない川が、水面近くでしゃがんで見ると、本当に素敵な場所なんです。水は意外ときれいだし、アシを揺らす風も良い。ハグロトンボにクロメダカ、見上げれば青空しかない。川に下りると、道路や建物が見えないんですよ。何と素敵な景色があるんだろう。そんなことに気がついて、地元のお母さんたちと一緒に、子どもたちをこの川で遊ばせる活動を数年前から始めました。

この活動を始めた当初は、「あんな汚い川に子どもを入れて病気にする気か」「気が狂っている」なんて、散々なことも言われました。みんな、足元の自然の豊かさに気がついていないんです。ヘドロの川じゃないのに、信じてくれない。大人はダメですよ。環境活動の旗を掲げるのは大好きなくせに、今ある自然を楽しんだり、そのまま愛そうとしない。スタート地点が違うんです。その点、子どもは違います。一番自然に近いところにいる。僕の自然観は、すべて子どもと川に教えてもらいました。

家下川のコオホネは絶滅したとされていました。ところが、川で遊んでたら、全滅したと思われていたコオホネが一株だけ出てきたんです。ヘドロの下で30年、耐えていたんでしょうね。水棲植物は凄い。そこで、地元の方に声をかけて、里親制度を作りました。株分けしたコオホネを各家庭で育て、楽しんでもらいます。一年たったら増えた分だけ、株を川に戻す。ゆるいやり方ですが、コオホネはどんどん増えています。面白いのは、里



農業用水路を覗く阿部さん。水路内に草が生えている。

親になった人は川をのぞくのが日課になることです。これが大事。自然のためにとか、環境のためには、決して見せない顔で川をのぞいていますよ。

家下川の近くに三面護岸の農業用水路がありますが、これも20年間放ってあったため、草がたまり、草が生え、自然が復活してきました。奇跡的にメダカが一杯いるんですよ。ところが、去年、事件が起きました。地元の



要請で市が重機を使った浚渫を始めたんです。「子どもたちがメダカの観察をしている水路に何すんだ」って、一旦工事を止めてもらいました。メダカが絶滅危惧種だとは知っていても、草と泥を取ったら棲めなくなる事を、みんな想像できないんです。結局、1km 区間を一気に浚渫する計画を、4 分割して 4 年間かけて行うことにしてもらいました。しかも、少量の草と土を残し、ワンドを残しながらの工事です。一番印象に残ったのは、施工業者の人ですね。ユンボを操る地元の業者です。「ごめんね、面倒くさいこと頼んじゃって」と缶コーヒーを持って行ったら、「う～ん、これね～、すげ～面倒くさいけど、面白いなあ」って。業者の人は、もともと物を作るのが好きなわけだから、考えるのが面白くて仕方ないんですよ。やっぱり、面白いというのが、キーワードですね。

また、農林水産省と土地改良区が、魚道をつくって田んぼにメダカが上がるようにしたいから、アドバイスをしたいと言ってきました。COP10の事業です。「水田魚道を作る前に、お前たちが過去の所業を反省しろ」と僕が言って、喧嘩になりそうになりましたけど(笑)。でも、河川管理者にも話の分かる人は、少しずつ増えています。結局、若い担当者ががんばってくれて、水田魚道の他にも昔からあった水路の段差(50cm)に、手作業の素晴らしい魚道が出来ました。この土地改良区という団体が魚のために魚道を作るなんて、日本初じゃないですか？ さらに魚のために、コンクリートの三面張り水路に、草を植えようという話になりました。県と市の河川課、矢作川研究所、市民グループなど、みんなが肩書なしで集まって、実際に草を植えました。特別な草ではありません。となりの水路にある雑草。その結果、小学生が捕獲して調べた数字ですが、700m 区間の生き物の数が 50 匹から 800 匹に増えました。

こういう活動は、地味ですが、面白いと思います。僕は、行政を目の敵にしていました(います?)が、行政の人は川の事を知らないだけなんだな。川に入って川の事を知れば、ハートのある人は動いてくれますよ。

とりあえず、大人も子どもも、エライ人もそうでない人も川に入ってもらおう。僕は、そういう付き合い方をしています。

今後の抱負について聞かせて下さい。

最近流行りで、何とか検定ってありますよね。“矢作川検定”みたいなもので、川の事知ってもらえるのも面白いかと。ただ、検定では絶対に実地試験をやりたいですよ。この魚を捕まえないとパスさせないとか、投網が開かないと不合格とか。ペーパーテストだけってのは許さない。知識だけでなく、実際に魚捕りをして、遊んでもらいながら川を知る。そういうスタイルの検定をやりたいです。

また、移動水族館の活動を、まだ年に 2、3 回というレベルでしか開催できていませんが、今後は、教育委員会とかを巻き込んで、小学校を順番に回れるようにしたいですね。ただそれには、それ専門でやれるような人材が必要です。あと資金も。だから、なかなかそこまでいけないですけど。僕はトヨタ自動車に、ガルウィングのドアをガァーッと開け



生物多様性インタビュー



ると、カッコいい水槽が現れる、そんな移動水族館（車）を、作ってもらいたいなど。折角、豊田市なんですから。それが半分冗談で、半分本気です。

2010.7.26 インタビュー

聞き手：田村省二（COP10 推進チームリーダー）

森川政人（自然保護官）